

オンライン留学参加学生のグローバル・コンピテンシーの傾向分析 —BEVI を用いた測定結果に基づいて—

清藤 隆春

KIYOFUJI, Ryushun
Research Center for Higher Education
Tokushima University
徳島大学高等教育研究センター

橋本 智

HASHIMOTO, Satoshi
Research Center for Higher Education
Tokushima University
徳島大学高等教育研究センター

要旨：徳島大学高等教育研究センターでは、2020年度の夏休みから長期休暇を利用して、米国の南イリノイ大学と連携してオンライン留学プログラムを実施している。BEVIで効果測定をしたところグローバル人材育成の観点から一定の効果のあることが明らかとなったため、コロナ禍後にも継続することを検討している。本稿では、学生の特質に合ったオンライン留学プログラムを開発することを目的に、夏休みと春休みの参加学生たちのグローバル人材としての資質の違いをBEVIによって明らかにした。分析の結果、夏休み参加学生は異文化に関心がより強い傾向にあり、春休み参加学生は、海外に関心はあるものの、他者理解をしながら課題解決に取り組む複雑な思考については消極的な傾向があることも明らかとなった。

キーワード：オンライン留学、グローバル・コンピテンシー、BEVI

1. はじめに

新型コロナウイルスが2020年の春頃から世界的に急激に拡大し、移動に制限がかかったことでオンライン化が進み、グローバル化に一層拍車がかかっている。大学の現場ではグローバル人材育成がコロナ禍以前から求められており、異文化理解活動や海外留学プログラムが積極的に取り入れられている。これまでは留学といえば長期留学が主流であったが、長期休暇（夏休みや春休み）に実施する短期留学プログラムの開発が加速的に進み、各大学で参加者数が大幅に増えてきている¹⁾。徳島大学高等教育研究センターでも、毎年夏休みと春休みの長期休暇を利用して、全学部学科の学生を対象に1ヶ月以内の短期海外留学プログラムを企画し、海外の大学・教育機関へ学生たちを派遣しており、コロナ禍後には再開する予定である。

学生の海外留学の主な目的は、グローバル人材育成である。グローバル人材の定義としては、〈要素Ⅰ〉「語学力・コミュニケーション能力」、〈要素Ⅱ〉「主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」、〈要素Ⅲ〉「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」を兼ね備えた人物とされている²⁾。短期留学プログラムでは、上記〈要素Ⅰ〉の語学力は測定可能であるが、〈要素Ⅱ〉や〈要素Ⅲ〉の面（異文化理解や日本人としてのアイデンティティの変化）の測定は非常に難しく³⁾、留学後に行われるアンケート等の満アイデンティティ評価が主にその効果測定に使われているのが現状だ⁴⁾。そのような中で、情動的・心理的变化を客観的に評価するオン

ラインアンケート「BEVI」^{注1)} (The Beliefs, Events, and Values Inventory) を海外留学の効果測定のために使用する大学が増えてきている⁵⁾。

徳島大学高等教育研究センターにおいても、グローバル人材育成を目的として、毎年夏休みと春休みに全学部学科の学生対象として海外の大学・教育機関に派遣しているが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点で、2020年度は全ての海外留学プログラムが中止となった。そこで、2020年度は米国の南イリノイ大学^{注2)} (以下、「SIU」) に相談を持ちかけ、オンライン留学^{注3)} プログラムを開発し、夏休みと春休みに実施したところ、オンライン留学には一定の効果のあることが明らかとなった⁶⁾ ため、2021年度の夏休みと春休みも同様にSIUのオンライン留学を実施しており、コロナ禍後にも継続したいと考えている。本稿では、2020年度と2021年度に参加した夏休みおよび春休みのプログラム参加学生たちのグローバル人材としての能力(=グローバル・コンピテンシー)の傾向について、BEVIを用いて明らかにし、参加学生の傾向に合わせたオンライン留学プログラム開発の参考とする。

2. 理論的枠組み

文化を表層文化と深層文化の2つに分ける二層構造説がある⁷⁾。表層文化とは、料理、服装、ジェスチャー、挨拶の仕方など、文化の表層部分に位置していて、外部から容易に捉えることができるものをさす。それに対して、深層文化

とは、外部の観察者が、相手の文化に入っても容易に把握できない価値観や思考法などを含む倫理的、精神的、道徳的、心理的な文化の側面などをさしている。なお、単純に服装などの目に見える様子のみを見れば表層文化であるが、その行動の背景の理由については深層文化に含まれる。このような文化構造を理解するために、「冰山モデル」(図 1)が使われる。このモデルでは、海に浮かんでいる氷山のうち海面から出ている部分が表層文化、海面の下に隠れている部分が深層文化であり、隠れていて目に見えない深層文化の方が圧倒的に大きい⁴⁾。

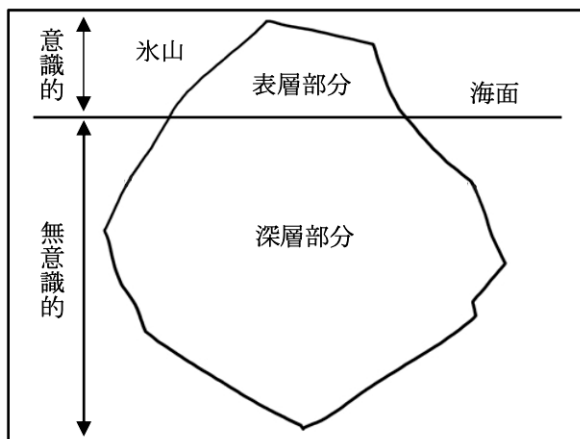


図 1 文化の「冰山モデル」(著者作成)

3. 研究方法

3.1 BEVI

今回使用するオンライン型の心理尺度測定ツール「BEVI」は、1990年初頭にアメリカの臨床心理学者 Craig N. Shealy らにより開発されている⁵⁾。価値、信念、そして人生の出来事に関する質問がなされ、その回答をもとに、「誰が、なぜ、どのような状況で、何を学習したのか」を明らかにすることができ、異文化交流や海外留学の体験の効果測定に使用可能とされている。日本では、2017年度に広島大学が BEVI-J として日本語版を開発したことで多くの大学で採用され、日本人学生を含めて数万件のデータが蓄積されている⁵⁾。本学が使用したのもこの日本語版の BEVI である。なお、BEVI の受検はオンライン上で行われ^{注 4)}、40 項目の個人についての背景質問と 185 のテスト項目の質問で構成され、所要時間は約 30 分である。テスト項目の回答の選択肢は、すべて 4 段階リッカート尺度となっており、受検者は「強く同意する」「同意する」「同意しない」「強く同意しない」から 1 つ選択していくようになっている。

表 1 BEVI のスケールの解説と解釈

I 形成的指標 (Formative Variables)	
スケール 1	人生におけるネガティブな出来事 (Negative Life Events)
II 中核的欲求の充足度 (Fulfillment of Core Needs)	
スケール 2	欲求の抑圧 (Needs Closure)
スケール 3	欲求の充足度 (Needs Fulfillment)
スケール 4	アイデンティティの拡散 (Identity Diffusion)
III 不均衡の許容 (Tolerance of Disequilibrium)	
スケール 5	基本的な開放性 (Basic Openness)
スケール 6	自分に対する確信 (Self Certitude)
IV 批判的思考 (Critical Thinking)	
スケール 7	基本的な決定論 (Basic Determinism)
スケール 8	社会情動的一致 (Socioemotional Convergence)
V 自己とのかかわり (Self Access)	
スケール 9	身体的共鳴 (Physical Resonance)
スケール 10	感情の調整 (Emotional Attunement)
スケール 11	自己認識 (Self Awareness)
スケール 12	意味の探究 (Meaning Quest)
VI 他者とのかかわり (Other Access)	
スケール 13	宗教的伝統主義 (Religious Traditionalism)
スケール 14	ジェンダー的伝統主義 (Gender Traditionalism)
スケール 15	社会文化的オープン性 (Sociocultural Openness)
VII 世界とのかかわり (Global Access)	
スケール 16	生態との共鳴 (Ecological Resonance)
スケール 17	世界との共鳴 (Global Resonance)

BEVI の回答結果については、サーバー上で自動的に統計的処理がなされ、教員等の管理者はオンライン上で管理者アカウントから分析結果を確認できる。その中の「全体プロフィール」(Aggregate Profile)を見ると、グループ全体のプログラム前の受検結果 (T1) とプログラム後の受検結果 (T2) について、表 1^{注5)}のように 17 のスケールで測定され、それらのスケールは理論・概念で 7 つ (I ~ VII) の領域に分けられている。各スコアは 100 点満点で表されており、50 点を平均としている。数値を比較する際、差が 5 点以上出ると有意性があるとされる⁵⁾。また、「一貫性」(Consistency) と適合性 (Congruency) の項目については、受検結果自体の妥当性を表す指標で、8 割程度の点数があることが望ましいとされている⁸⁾。本調査の対象となっているプログラムはいずれも、「一貫性」と「適合性」がすべて 8 割程度であったため、分析するのに妥当な数値であると言える。

3.2 分析方法

本稿では紙面の都合上、上記の 17 のスケールの全てを扱うことはできないため、グローバル人材の定義²⁾の中でも、著者らが最も関心を寄せる「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」に関連する「スケール 8」(社会情動的一致)と「スケール 15」(社会文化的オープン性)の 2 つに絞り、プログラム開始前の BEVI の結果「T1」の分析を行うこととした。この「スケール 8」(社会情動的一致)は、7 つの領域のうち「IV 批判的思考」の領域に入っている。これは、自分だけでなく他者をよく理解し配慮ができる傾向を示す項目である。グローバル人材の育成においては、異文化の人へ配慮ができると同時に、自分自身と自文化への理解が深い学生を育成したいと思っており、その点でこの項目は重要なものの 1 つである。「スケール 15」は、7 つの領域のうち、「VI 他者とのかかわり」の領域に入っている。社会や文化の様々な要素に興味や関心があり、その差異に気づくことができる特質を表すが、グローバル人材には不可避なものである。

3.3 調査対象者

本調査の対象者は、SIU オンライン留学の 2020 年度夏休み参加学生 27 名、2020 年度春休み参加学生 14 名、2021 年度夏休み参加学生 21 名、2021 年度春休み参加学生 7 名、合計 69 名である。

3.4 倫理的配慮

オンライン留学参加希望者は、担当教員と個別面談をして、詳細説明に同意した上で参加した。また、個人情報の取り扱い方法に同意した上で、BEVI を受検している。BEVI の数値結果は、受検者には表示されず、教員などの管理者のみが閲覧できるようになっており、また管理者のアカウントにはグループ全体の結果が表示されるだけで、個人は特定されない。

4. 分析結果および考察

図 2 は、2020 年度の夏休み参加学生と春休み参加学生がプログラム開始前に受検した BEVI の「スケール 8」と「スケール 15」の 2 つの Aggregate Profile の数値である。縦軸は BEVI の数値(点)を表している。

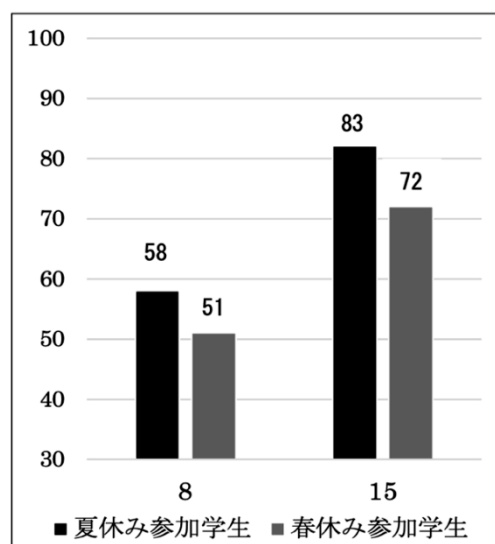


図 2 2020 年度参加学生のスケールの数値

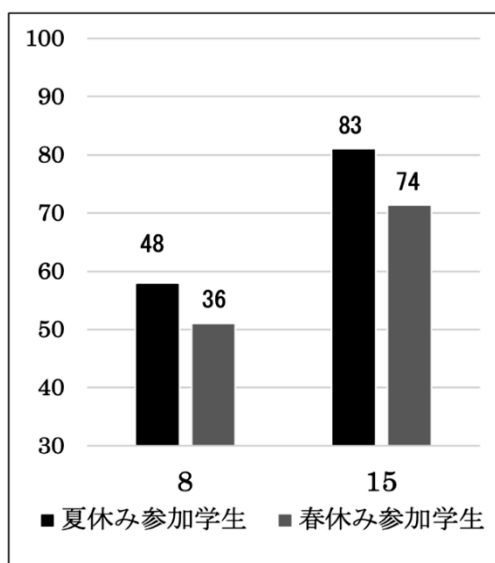


図 3 2021 年度参加学生のスケールの数値

図 3 は、2021 年度の夏休み参加学生と春休み参加学生がプログラム開始前に受検した BEVI の「スケール 8」と「スケール 15」の 2 つの Aggregate Profile の数値である。縦軸は BEVI の数値(点)を表している。

4.1 スケール 8「社会情動的一致」

「スケール 8」は、7つの領域のうち「IV 批判的思考」の領域に入っており、自分だけでなく他者をよく理解し配慮ができる傾向を示す項目である。グローバル人材の育成においては、異文化の人へ配慮をしながら、自分自身と自文化への理解のできる学生を育成したい。その点でこの項目は重要であるが、図 2 を見ると、2020 年度の夏休み参加学生は 58 点、春休みは 51 点で、どちらの参加者も高い数値ではなく、さらに春休み参加学生は夏休み参加学生と比べて有意に低い。図 3 を見ると、2021 年度の夏休み参加学生は 48 点、春休み参加学生は 36 点で、どちらの参加者も 50 点を切っていて低く、さらに春休み参加学生は夏休み参加学生に比べて有意に低い。

2020 年度、2021 年度のいずれも、春休み参加学生は、海外に関心はあるものの、他者に配慮して課題解決に取り組む複雑な思考を積極的に行わない傾向があると考えられる。SIU オンライン留学では、画面上で異文化の学生達とディスカッションをしたりする機会が多いため、「スケール 8」の数値の低い学生達にはハードルが高いと思われる。今後の春休みの SIU オンライン留学プログラムを開発にあたっては、オンライン留学前に、異文化交流をスムーズに取り組めるための学内サポートプログラムを多めに用意するなどの工夫がいろいろと考えられる。

4.2 スケール 15「社会文化的オープン性」

「スケール 15」は、7つの領域のうち、「VI 他者 とのかかわり」の領域に入っており、社会や文化の様々な要素に興味や関心があつてその差異に気づくことができる特質を表す。これはグローバル人材には不可避なものであるが、図 2 を見ると、2020 年度の夏休み参加学生は 83 点で、春休み参加学生は 72 点と、夏休み参加学生は春休み参加学生に比べて有意に高く、80 点以上ある。図 3 を見ると、2021 年度の夏休み参加学生は 83 点で、春休み参加学生は 74 点と、こちらも夏休み参加学生は春休み参加学生に比べて有意に高く、80 点以上ある。

2020 年度、2021 年度のいずれも、夏休み参

加学生は元々異文化に強い関心があると考えられるので、SIU のオンラインだけの異文化体験だけでは満足せず、数値を更に伸ばすことは難しいと考えられる。オンライン留学の期間中に、学内の留学生との異文化間協働学習などの学内プログラムを融合させることで、学生達により深い学びの機会を提供する必要がある。

5. 今後の課題

2020 年度と 2021 年度の SIU オンライン留学の夏休み参加学生と春休み参加学生の BEVI の結果から、夏休み参加学生は異文化に関心が強い傾向にあり、春休み参加学生は海外に関心はあるものの、他者理解をしながら課題解決に取り組む複雑な思考は積極的に行わない傾向があることが明らかとなった。2 年分のデータを分析したことで夏休みと春休みのオンライン留学に興味を持って参加する学生の傾向はある程度明らかになった。2022 年度以降の傾向分析を継続するとともに、今回の分析結果をもとにして、学生の傾向にあつた効果的な学内プログラムをオンライン留学プログラムに融合させて、より良いグローバル教育プログラムを提供していく。

注

8. Beliefs, Events, and Values Inventory (2018). About the BEVI. Retrieved March 1, 2021, from <https://thebevi.com>
9. アメリカ南イリノイ大学 (Southern Illinois University) は本学の海外学術交流協定校である。プログラムの共同開発には、英語センターの CESL (Center for English as a Second Language) (<https://cesl.siu.edu>) が協力してくれた。なお、CESL の現地での英語プログラムには、コロナ禍以前には毎年本学から学生を複数派遣している。
10. オンライン留学は、バーチャルに海外の学生と繋がって課題解決型のプロジェクト等を行う COIL (Collaborative Online International Learning) とは区別される。本稿では、オンライン留学を、「一定期間オンラインで海外大学の授業を受けたり、海外大学生と交流を行う国際交流プログラム」と定義する。
- 4) BEVI の日本語版は以下のサイトからログインして受検できる。
<http://jp.thebevi.com/test-admin/>
- 5) 上記「注釈 4」の「BEVI の日本語版 (<http://jp.thebevi.com/test-admin/>)」受検

の際に表示される結果「BEVI のスケールの解説と解釈」の表を元に著者が作成した。

引用文献

- 1) 奥山和子 (2017) 「留学経験がもたらす効用としての自己効力感の形成プロセス：質的研究手法を使って」『大学教育研究』 25, pp. 83-101, 神戸大学教育推進機構.
- 2) グローバル人材育成推進会議 (2012) 「グローバル人材育成戦略 (グローバル人材育成推進会議 審議まとめ)」
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf>, (最終アクセス日：2021年11月1日) .
- 3) 永井敦 (2018) 「BEVI によるショート・ビレッジ型留学プログラムの効果分析—『グローバル人材』は育成できるのか?—」『広島大学留学生センター紀要』 22, pp.38-52, 広島大学留学生センター.
- 4) 大西好宣 (2019) 「短期留学及びその教育効果の研究に関する批判的考察：満足度調査を超えて」『JAILA JOURNAL』 5, pp.51-62, JAILA 事務局.
- 5) 西谷元 (2017). 留学効果の客観的測定・プログラムの質保証-The Beliefs, Events, and Values Inventory (BEVI-j)-. 広島大学高等 教育研究開発センター高等教育研究叢書. 137, 45-70
- 6) 清藤隆春・橋本智 (2021) 「BEVI を用いたオンライン留学の効果測定-コロナ禍でのグローバル人材育成の試み-」徳島大学高等教育研究センター学習支援部門国際教育推進班紀要：12-21 .
- 7) 石井敏ほか (2013) 「異文化コミュニケーションの基礎概念」第1章. 石井敏ほか (2013) 『初めて学ぶ異文化コミュニケーション—多文化共生と平和構築へ向けて—』 pp.11-36, 有斐閣.
- 8) 東矢光代・當間千夏 (2019) 「世界の捉え方に見る学習者の特性とクラス・ダイナミクス：BEVI の結果に基づく分析」『言語文化研究紀要：Scripsimus』 28, pp.23-45, 琉球大学法文学部国際言語文化学科欧米系.